

巻 頭 言

日本歯学会会長 宇田川 俊 一

わが国がその資源を大部分外国に頼らざるを得ない立場でありながら、世界有数の経済大国に成長し得た陰には、微生物資源の活用も大きく貢献しているものと思われる。有用微生物の探索は今日では国内はもとより地球上の隅々まで目が向けられている。菌類についてもこれまで環太平洋はもちろん、中国、インド、オセアニア、南アメリカ、アフリカなど未知の地域を求めて学術調査が繰り返され、収集に取り組んできたが、総数64,200種 (Hawksworth et al., 1983) ともいわれる種類の多さから考えて、遺伝子資源としての菌類の将来は21世紀を迎えても枯渇することはないであろう。

それにしても折角収集した菌類を使い捨てにしないで整理・保存し、長期的に活用することも、今後わが国での開発研究を進展させるための重要課題の一つである。これまで基礎的研究機能の欠如から、研究のための菌類の標本や菌株を一方的に欧米先進国から借用してきたことに対する反省もこめて、学会としてもこの課題に真剣に対応して行かなければならないと思う。

先般 (1989年5月29~30日)、スペインでの国際会議の帰途、革命200周年に燃えるパリに立寄った。パリの新都心デファンス地区で先進国首脳会議 (アルシュサミット) が華々しく開催され、混迷する世界経済から人類の生存にかかわる自然環境の問題まで、20世紀末の社会がかかえている歪みをどのように解決して行くかが話し合われたという。そのパリ区内5区カルチュ・ラタンの東、セーヌ左岸のオステルリッツ駅に接して植物園 (Jardin des Plantes) があり、園内に今度の旅の目的の一つにしていたフランス国立自然誌博物館がある。28年前に今関六也先生がここを訪問されたが、その印象記 (森林防疫ニュース, 11(6), 25, 1962) を当時大変興味深く読んで以来、私にとって憧れの場所の一つであった。その後小林義雄先生も訪れて標本を調べられたそうである。今関先生の素晴らしい紹介に蛇足を加えるのも気が引けるが、簡単に私なりの印象を述べてみたい。

パリ植物園は1626年にルイ13世が王室薬草園として開設したのが始まりで、1640年王立庭園として一般に公開され、後に王立植物園に継承された。18世紀にビュフオン (Buffon, 1707~1788) が園長になって拡張され、19世紀にはセーヌ川の土堤まで広がった。自然誌博物館はフランス革命を機に植物園を改革し、1793年に設立されたのである。1640年以來の庭園に加えて、18世紀にはフランス式庭園、19世紀には英国式庭園が完成された。1936年に植物展示館 (Botany Gallery) が開設され、現在の植物研究部門の母体となったという。植物館員は9万坪の敷地をもった植物園の広大な緑に囲まれた、パリ市街のど真中とは思えない羨しい環境の中で研究に没頭しているわけである。

Buffon の時代からあり1806年にモデルチェンジしたという植物園正門から入ると左側に並ぶ自然誌博物館の研究棟の一つに Laboratoire de Cryptogamie がある。かねてから子囊菌類・不完全菌類の研究を通じて親交のあった Dr. Mouchacca に玄関口まで出迎えられ、早速4階の研究室に通された。今関先生が訪れた時代には Prof. Heim が館長をされていたときで当時の錚々たる菌学者はもはや亡くなられたり、移られたり、引退されている。この場所で Prof. Heim が研究されていたとか、Dr. Le Gal (マダガスカルの Discomycetes 研究), Dr.



パリの国立自然誌博物館にて（ビュフォンを記念する石板が壁に掲げられている）

Nicot（不完全菌類研究）—幸いに彼女とは研究所から自宅に電話を入れて頂き 元気な声を聞くことができた—など著名な先輩が仕事をされたという研究室を回り、現在の菌学部門を担う Dr. Cailleux（蕈生子囊菌類、現在は担子菌類研究）、Dr. Locquin-Linard（蕈生菌類）など旧知の菌学者を研究室に訪ねた。

多くのヨーロッパの菌学研究所がそうであるように、ここにも昔からの建物・施設を大切に使っていた。恐らく今関先生が28年前に見られた研究室と基本的にはほとんど変わっていないものと推察される。ただ顕微鏡は1960年代には予想もできなかったことであるが、日本製の高級生物顕微鏡が幅を利かせていた。実験設備についていえば、わが国のように充実した内容を擁している研究室はみられなかった。無菌作業台（クリーンベンチ）にしても、培養室にしても、菌株保存のための諸設備にしてもほとんどが旧式である。

しかしながら、今関先生が驚嘆された腊葉館は依然として世界一ともいえる威容を誇っていた。植物標本として750万種類をもっているといわれている。そして、たとえば菌類でいえば Montagne (1784~1866) のような歴史的な標本がすぐその場で取り出せて研究の対象とすることができるのである。パリの自然誌博物館にかぎらず欧米の主要な大学や研究所では、それぞれ独自のやり方で標本の収集と整理に多大なエネルギーを投入している。このように欧米では長期的な視点に立って菌類の収集をはかっているようである。華やかな先端技術の研究の一方で、こうした基礎的な部分こそ一国の学術文化の基盤となるものだが、その点わが国は依然として後進国である。最近の風潮である“scrap and built”が貴重な資料の喪失につながらなければ幸いである。

パリ区民に愛されているというフォンテーヌブローの森の美しい自然を目の前にして、フランス国民の自然に接する態度を垣間見る思いがした。